

名古屋 文化情報

2017
7・8
July / August

No. 375
NAGOYA
Cultural
Information

随想／大野 左紀子(文筆家) 視点／40号を迎える芸術批評誌『REAR』
この人と／山本 眞輔(彫刻家)
いとしのサブカル／マグナム 今池(今池プロレス代表)



2017

7・8

July / August

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 父と芸術
大野 左紀子(文筆家)…………… 3

視点 40号を迎える芸術批評誌『REAR』…………… 4

この人と…
山本 眞輔(彫刻家)…………… 6

ピックアップ 名古屋桜山に生まれた、ひとり出版社「桜山社」…… 10

いとしのサブカル マグナム 今池
(今池プロレス代表・今池西南商店街振興会副理事長)…………… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (現代舞踊家)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 森本悟郎 (表現研究・批評)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽと代表)
- 米田真理 (朝日大学経営学部教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

表紙

作品

キリコの街

(2000年/写真/356mm×432mm)

眠りの中に現れる夢。言葉をしゃべれない幼い頃に、記憶に残ってしまった不思議な光景。

それらは、画家のキリコの絵に描かれた白昼夢にも通じる。夢の中で遭遇してしまうシュールな光景を、日本各地の街で発見したシリーズ。



中里 和人 (なかざと かつひと)

1956年三重県生まれ。写真家。東京造形大学教授。

地誌的ドキュメントを中心に、日本のランドスケープ作品を発表。多くのアートイベントに参加し、インスタレーションやワークショップを開催。写真集に「湾岸原野」、「キリコの街」、「小屋の肖像」、「東京」、「路地」、「ULTRA」「lux」などがある。

<http://nakazato.info>

「2016年 名古屋市民文芸祭」
(第八七回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
俳句の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆

名古屋市長 白沢小学校トワイライトスタイル5年
長尾 しづね
今日プールもぐれるようになりました

◆市教育委員会賞◆

名古屋市長 白沢小学校トワイライトスタイル5年
池元 彩乃
おじいちゃんいっぱいくれた夏野菜

◆市文化振興事業団賞◆

名古屋市長 立若水中学校3年
山口 明日香
十五歳心に響く花火待つ

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆

名古屋市長 立白中学校3年
小出 まゆ
何がある入道雲のその向こう

◆中日賞◆

幸田町立立南中学校1年
平岩 結夏
母の日や今日なら言える「ありがとう」

随想

父と芸術



おおの さきこ
大野 左紀子(文筆家)

1959年、名古屋市生まれ。1982年、東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。83年から2002年まで発表活動を行う。2003年アーティストを廃業し、文筆活動に入る。著書は『アーティスト症候群』（明治書院、2008）、『アート・ヒステリー』（河出書房新社、2012）、映画評論『あなたたちはあちら、わたしはこちら』（大洋図書、2015）など。平成28年度名古屋市芸術奨励賞受賞（美術・映画評論）。現在、名古屋芸術大学非常勤講師、京都造形芸術大学客員教授。<http://d.hatena.ne.jp/ohnosakiko/>

子どもの頃、私に芸術への志向を植えたのは父だった。

父の書斎には、広隆寺の弥勒菩薩の写真が飾ってあった。私がその写真を見ているのに気づいた父は言った。「この人、何か考えてるみたいでしょう?」「何考えてるの?」「世の中の人々を幸せにするにはどうしたらいいか考えているんだよ」「ふーん」。

えらいことを考えているもんだと思った。この人は何千年も世の中の人々を幸せにすることについて考えているのだ。すごいな。

京都国立近代美術館にロダンの『ラ・パンセ』が来たことがあり、父に連れられて見に行った。大きな大理石の塊から彫り出された俯き加減の女の人の目線と自分の目線を合わせようと、私は下から見上げた。

「さきちゃんの方は見てないでしょう?」と父が言った。「……見てない」。私は困惑して父に尋ねた。「この人、どこ見てるの?」「自分の心の中を見つめているんだよ」。

自分の心の中を見つめるとは、どういうことなのだ。子どもの私にはよくわからなかった。だが彫刻の女の人がここではない、どこ

でもないところを見ている様子なのは、父の言う通りだった。

世の中の人々の幸せについて考えること。自分の心の中を見つめること。それが父の芸術観であった。

ずっと後になって現代アートなどをやりだして、父の考えは少しナイーブ過ぎると思うようになった。芸術には芸術だけの課題があるのだと思いながら、伝統的なモチーフや表現方法から離れた。そういう私の作品を見て父は、「これはいったい何を訴えているんだ」と言った。私の説明は父を混乱させた。

20年続けた美術作家の活動を停止し、ものを書き出してからしばらくの間、父には「美術作家をやめた」と言うことができなかった。自分にはよくわからないながらも、娘が作家活動をしていることを、父は誇りに思っていたようだから。

5年前に2冊目の美術評論を見せた時、父はもう本を読む気力を失っていた。父が他界して3年経った今、私は芸術と幸せ、芸術と心の関係について考え続けている。

40号を迎える芸術批評誌『REAR』

わが国に美術・芸術関連紙誌はあまたあるが、批評に軸足を置いたものはあんがい少ない。要は儲からないからである（実際美術系メディアの出版事情は厳しく、老舗の美術出版社も2015年に民事再生法適用を申請している）。まして〈地域〉にこだわった批評媒体など稀で、まず「成立するのか？」と疑いたくなる。ところが2003年に「芸術+批評+ドキュメント」を標榜して名古屋で創刊された芸術批評誌『REAR』（リア）が、まもなく第40号を刊行する。準備段階から同誌に関わってきた高橋綾子さん（名古屋芸術大学教授）への取材をもとに、『REAR』誕生から今日までの歩みを紹介したい。（まとめ：森本悟郎）

創刊まで

高橋さんによれば2000年代初頭、名古屋では芸術をめぐるいくつかの動きがあったという。その高橋さんたちも、当時伏見にあったギャラリーで顔を合わせては「何かしたいね」という話をしていた。ギャラリー近くの蕎麦屋の2階で、評論家の馬場駿吉氏や新聞記者の井上昇治氏を中心に何度か話し合いを重ね、活字メディアの方向性がみえてきた。

蕎麦屋会議を始めてから1年ほど後の2002年10月、芸術批評誌『REAR』創刊記念パーティーを開き、当日の出席者には「創刊準備号」を配布。巻頭には編集メンバーの一人である野村幸弘氏（岐阜大学助教授・当時）による「創刊に向けて」という、マニフェストともとれる一文が掲げられている。

批評誌名の〈REAR〉は、「育てる」という意味をもつ。芸術家が作品を制作し、発表しても、それをしっかり受けとめ、批評の言葉を投げ返す作品の受け手がいなければ、文化・芸術は育たない。文化の土壌に「記録」（ドキュメント）という水をやり、「批評」という栄養を与えるのが、この批評誌の大きな役割だ。

また〈REAR〉には「後衛」という意味がある。

（後略）

反響はとても良かったという。パーティー席上で挨拶に立った美術評論家の中村英樹氏は「こんな状況をぼくは待っていた」と歓迎の意を表した。

創刊号（2003.1）は「名古屋発／名古屋脱」という特集を組んだ。評論家、大学教授、学芸員、ギャラリスト、作家らへおこなった「アンケート：15人への共通質問・個別質問、その回答」と3本の論考によるものだ。アンケートの共通質問は「作家として／受け手として／教育者として、この地域（中部、東海、名古屋）の現代美術をとりまく環境（制作・発表・鑑賞・受け手・作家・

教育機関）を、是としますが、否としますが？」というもの。名古屋という地方意識を前面に出した問いであり、「名古屋で自分たちに何ができるか」というところから出発した決意が凝縮された特集だった。

誌面は特集のほかに「批評」と「REVIEW」（レビュー）とで構成されており、これは例外はあるものの今日まで続いている。

危機と転機

こうして刊行が始まった『REAR』は第4号までの1年間、レイアウトもデザインも編集メンバーによる手探りの作業だった。《原稿の取りまとめやレイアウトも試行錯誤で、中身を充実していくためにはこのままでは厳しいかな》と考えていた矢先、高橋さんは以前一緒に仕事をしたことのあるデザイナーの夫馬孝氏と書店で再会する。批評誌の現状を話すと、デザインを引き受けてくれた。プロのデザイナーの手が入ることで、『REAR』は第5号からロゴも含め雑誌としての体裁を洗練させた。また、創刊して間もなく建築家の武藤隆氏が事務局としてメンバーに加わっている。



第6号

第14号

第39号

「名古屋のコンセプチュアリズム」を特集した第6号（2004）では個別に原稿を書いてもらうだけでなく、座談やインタビューも載せて、より雑誌らしさを出した。高橋さんは《この号でドキュメントしていくこと、名古屋・中部地域をコンテンツとして見据えていく方向が見えてきた気がした。『REAR』を長く続けていくためのレッスンになった号》と述懐する。

しかし《十数号出してくると、自分たちだけの能力や人脈についての限界に気づいた。信頼できる協力者に意見を請いながら特集を作っていく方法もある》だろうと、第14号の「再発見：名古屋の写真史」（2006）では名古屋市美術館学芸員・竹葉丈氏の協力を得て、編集メンバーの山本さつき氏（美術批評）を中心にチャートを作ったりもした。

創刊時のメンバーの中にはその後それぞれの事情で辞めた人もあれば編集現場から離れた人もあり、また新しく参加する人たちもあった。ただ、《記念すべき第30号の時に、編集メンバーがとうとう増田千恵さん（編集・制作）と私の二人になったんですよ。



創刊準備号と第1号

「困ったね」っていいながら、第30号なので力を込めて「名古屋の画廊史」(2013)を作るんですね。でも、二人だと議事録をとることなく、客観性に欠ける》ことが問題だった。この危機を乗り越えて翌号からはスタッフも増えた。

第33号は生誕100年を迎える画家・浅野弥衛を特集した「弥衛さん」(2014)で、その号からデザインはゲラーデ舎の田端昌良氏にバトンタッチされ、ロゴは継承しながらテイストが変わり、印刷所も変わって、表紙も2色から4色刷りになった。『REAR』は幾度も危機に見舞われながらそのつど幸運にも恵まれ、転機としている。

万博・トリエンナーレ・震災



愛知万博特集(データブックも作った)

愛知万博(2005)とあいちトリエンナーレ2010は『REAR』のメンバーにとっても重要なイベントだったようだ。万博開催直前に刊行した第9号「愛知万博をアートで楽しむ」(2005)を高橋さんたちは、《万博に迎合するのではなく、主体的に頼まれてもないことをやろうという気持ちになり》、県外から来る人たちを意識して《万博でどんなアートが見られるのか、あるいは愛知県内の美術展がどう連動しているのかを情報提供できないかと考えて作った》。万博だけでなく、いろんな事業を見て帰ってほしいとの思いからだった。



3回にわたったトリエンナーレ特集

トリエンナーレ開催前年刊行の第21号「トリエンナーレ!!!」(2009)では各地でビエンナーレ(隔年祭)、トリエンナーレ(三年祭)として開催されている国際(芸術)展の現状や課題について取り扱い、祝祭に前のめりにならない姿勢を見せている。開催直前の第24号「I♡あいちトリエンナーレ」(2010)も万博特集同様、レビュー誌ながらイベントのプレビューであり、共催・並行企画や市内のギャラリー情報なども入れた。

しかし実は戦後名古屋現代美術史を編むのが高橋さんたちのほんとうの目的だった。《「名古屋って現代美術のメッカだね」と

言われながら、戦後どうということが起きて来たのか、名古屋の美術史というのがきちんと編まれていない》ことから、《批評家のレベルでドキュメントできるものをきっちり書いて『REAR』に掲載する。それが使命だと思った》。「戦後名古屋の現代美術史入門」は全6章を5人で分担執筆し、1945年から2000年までの動向を多角的に検証した。これは今や重要な参考文献となっている。開催翌年刊行の第25号では、第2特集「あいちトリエンナーレ2010について」としてこのイベントを総括している。

2011年に東日本を襲った震災は直後から美術界にもさまざまな影響を与えたが、『REAR』編集メンバーたちもこの事態にどう応えるべきか煩悶したという。《すぐに震災のことを取り上げなければと思う反面、時間が必要だった。ようやく言語化できたのは3年後だった》。第31号「震災とミュージアム」(2014)がそれである。この時、高橋・増田の両編集人は仙台まで取材に出かけ、陸前高田出身の写真家・畠山直哉氏へのインタビューは、この号からメンバーに加わった楠本亜紀氏(写真評論)が担当した。

『REAR』という雑誌の特性

高橋さんに、編集会議で特集を決めるプロセスについて尋ねてみた。

《数人でコーヒESHOPで話しながら、何がいいかって雑談をしながら、最近見た展覧会や、読んだ本、そういうことも含めて『REAR』でまだやってないこと、まだ深まってないところ、わからないこと、知らないこと、疑問とかを出し合います。その時に疑問の多いものについて話し合っているうちに、自分が書きたいんじゃないでなくて、読みたいものが浮かんでくる。あるいは、この人に発言してほしいというもある。信頼の置ける人に話を聞いたり助言を受けると、なんか筋みたいなのが見えてくる。そうすると特集にできるかもしれない。》

編集長を置かずみんなできるとん話し合うこと、当たり前だと思われていることや些細に見えるようなことをなおざりにせず、「立ち止まって考えてみる」という姿勢が『REAR』にはあるようだ。それが商業誌にはない特性と魅力を生み出していると思われる。手探りはまだまだ続くだろうが、『REAR』は〈名古屋発〉でありながら既に〈名古屋脱〉を遂げている。まだ見ぬ第40号以後にも期待したい。



編集会議の様子(2017年5月9日)

※『REAR』は全国の一般書店ほか協力店で入手できますが、NADiff/a/p/a/r/t(東京都渋谷区恵比寿)、ちくさ正文館書店本店(名古屋市中種区)、ナディップ愛知(愛知芸術文化センター B2F)にはバックナンバーもあります。

この人と...



彫刻家

やま もと しん すけ

山本 眞輔さん

創造する事は一代限りでONLY ONE

彫刻家の山本眞輔さんは、2015年に「山本眞輔の世界 彫刻作品集」を刊行された。また、取材にうかがう数日前には、昭和37年以来毎年恒例となった日展への出品を済ませたばかりのとのことであった。山本さんには彫刻界の重鎮という近づき難さはない気さくなお人柄で、また若かりし頃に教えを受けた筆者は、タイムスリップをしているかのように懐かしい話、プライベートの話などを愉しくうかがうことができた。

(聞き手：倉知 外子)

初めての作品集を刊行

手入れの行き届いたガーデンが美しく、ご自宅の欧風の白い建物のお部屋には、ギャラリーのようにたくさんの作品が並ぶ。主の山本さんは、アトリエで高さ2.2メートルの力士の肖像を、リフトに乗って制作中であった。1年半前の作品集の刊行が、初めての刊行と



初の作品集

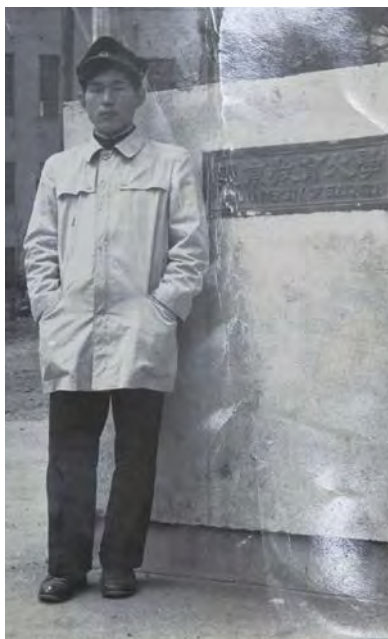
は意外に思える程、長年にわたって活躍されている。作品集には、野外に設置された74点に及ぶ主要な作品がまとめられている。街なかや公共施設、自然の中に同居している市内31カ所の彫刻作品はツアーを組んで観て歩きたい衝動にかられる。名古屋以外にも愛知県内や他県の街なかで、だれもが出会える芸術作品が、風景に調和して静かに佇んでいる。山本さんは、日本芸術院会員（彫刻界

では全国で9人、愛知県では3人)、公益社団法人日本彫刻会理事長、日展理事他を務め、年間40回を超す東京との往復や名古屋市立大学名誉教授の仕事など、多忙な日々を過ごされている。

カエルの子はカエル？

山本さんは、愛知県幡豆郡一色町（現西尾市一色町）で、中学校の美術教諭の父と、子どもを褒めてのばすタイプの母のもと、教育に惜しみなく力を注がれる環境に育った。父はいつも絵を描き、美術に関する素材が身の回りに存在した。山本少年もまた、絵を描き、粘土遊びに興じ、飛べない飛行機や走らない電車、進まない船、聞こえないラジオなどを子どもの感性で自由気ままに工作し、一人で遊ぶことが多かった。そしてこの頃の自然との触れ合いは、後の創作活動に大きな影響を与えることになる。しかし、高校生までは美術界に関わることを全く意識することもなく、西尾高校の普通科に進学。書道家の祖父に、字の勉強をと漢文を読まされ、父には英語を薦められ、「今思うと勉強ばかりしていて、問題児だったな」と明るく笑う。選択教科は音楽で、合唱も好きであった。

彫刻家と教育者への道



東京教育大学にて

転機は大学受験のとき。父は英語教師の道を望んでいたが、愛知教育大学の彫塑・彫刻科に入学。英語は将来必要とされる学問であり、当然学ぶものと捉え、それ以外の何かも学びたいと考えた結果、自然に彫刻科を選択していた。進学先の教育大学で出会った彫刻の先生に才能を見い出され、本気でやればプロになれると背中を推してもらった。

翌年、東京教育大学（現・筑波大学）の彫塑専攻科に合格。くわえて高校の英語教師の資格も取得した努力家である。その後、大学院に進学。

29歳の時、イタリアに留学したいと一念発起する。しかし、資金がないため、教会のイタリア人神父に「なんでもするから」と頼み込んで語学を学び、語学力と彫刻の審査による選抜試験を見事にクリアしてイタリア政府奨学金留学生となった。

人生を豊かに、そして好きな彫刻も継続していくにはと考え、名古屋市立保育短期大学で講師をしたことが教育者人生の始まり。平成8年に名古屋市立大学芸術工学部教授、平成14年に名古屋市立大学芸術工学部大学院芸術工学研究科教授に就任。2年後には、名古屋市立大学名誉教授となる。その間に幼児教育に関わり、「幼児期の造形教育、創造教育の重要性をつくづくと感じ、そこに携われたことを誇りに思う」と山本さんは語る。「芸術は、作家として作品を制作することにとどまらず、作品を生み出す人格形成、人間形成に大きな影響を与えることに気づき、それゆえ幼児期の芸術教育の重要性に確信を得た」と自負される。「勤めつつ、教育の研究と自分自身を探求しながら作家活動をすることができた。作品を発表できて、現在の地位を得ることができて、生活の糧を得られて…申し訳ないな」と感謝の言葉が続く。『次の後継者を育てて』とよく言われるが、後継者の育成は必要がなく、できるものでもないというのが持論。「伝統的な分野では様式の世襲はできるが、新しく創造するものはその作家一人の一代限り。作家として得たものを伝える事はできるが、後継者として、彫刻家をつくる必要は全くない」と断言される。

ぶれることのない2本の軸足

18歳から77歳の現在に至るまで軸足がぶれたことがないのが自慢とのこと。その1本は、彫刻の世界のみに生き続けていることと、もう1本は、どんなに評価され、認められようが活動拠点を名古屋に置き続けたということ。中央(東京)に出るという考えを持ったことは一度も無かった。その考えに確信を得たのは、イタリア留学の時の師であるFazzini先生に「日本の田舎から来ました。」と自己紹介をしたら、「ローマから見たら日本のどこであろうと皆同じだ。君の居るところが中心なんだ」と言われたことだった。これまでの活躍の軌跡からも、山本さんの置いてきた軸足に間違いがなかったことがうかがえる。山本さんの作品は式年遷宮記念神宮美術館(三重県伊勢市)、浄土宗総本山知恩院、知恩院和順会館にも奉納されている。その他、作品集に掲載している74作品をはじめ、数多くの作品が各地で風景に融和している。

日展での入賞の他、愛知県芸術文化選奨文化賞、内閣総理大臣賞、東海テレビ文化賞、西望賞、中日文化賞、教育文化功労者・愛知県知事表彰、白日展吉田賞、日本芸術院賞等を受賞し、文部省派遣在外研究員として再度のイタリア留学、日展審査委員・評議員を務めた。なお、日展には23歳で初入選して以降も、現在まで毎年出品している。

さらには、平成12年一色町名誉町民顕彰、平成13年に紺綬褒章受章など輝かしい功績を残されてきた。



ローマ美術学校で

命を懸けるに値する道

29歳で人生の善き伴侶と出会う。奥様は画家で、お嬢さん2人も絵を描く。長女は医療の道に、次女は家庭生活と両立しながら作品を制作している。2015年には、奥様の澄江さんと次女の眞希さんとともに、家族3人で作品を発表した<それぞれの道>展を開催。孫8人に囲まれているおじいちゃんとは思えないほどの若さで、生涯現役と意欲が溢れるが、身の回りお世話は全て奥様任せ。「一人では何もできない」と、甘えることができる重心をチャリとのぞかせる。42才の時に大病をした際の、奥様の献身的な介護の名残りかなとも思われる。「僕を駄目にした2人の女性は、『男は厨房に入るべからず』といった母親と、家事一

切をさせない女房だ」と金婚式を迎える幸せ一杯の苦笑い。

「彫刻は美しくなければならぬ。人生は楽しくなければならぬ」が信条とのこと。誰もが知っている〈美〉は〈愛〉と同じく、その存在は知っていても目には見えない。この、〈目〉に見えないものを見える〈かたち〉



1966年頃 アトリエにて

に置き換えることが彫刻家の仕事。癒し、感謝、強さ、怒りや悲しみ、希望や絶望までも彫刻の〈美〉の表現の対象となる。目に見える〈かたち〉として残るからこそ、時の経過の中で異物になってしまわないよう深く熟考する。一つの道を選ぶことは、通過しなければならない大変な努力、修行が必要であり、そこには悲しみ、喜びなどが伴うもの。「彫刻家の道を選び、続けていくための大きな力となってくれた善き伴侶との出会いに感謝したい」と語られた。そして「人生を楽しく過ごせることは一人の力だけではなく、巡り合わせ、運命的なものが大きい。作家人生60年、これからも自分が選んだ道を愉しんでいく。この道は命を懸けるに



リフトに乗って

値すると信じている」と満面の笑みが溢れる。制作に向かう最近の心境は、「不思議な感覚だが、自分ではない何かから、作るのだと突き動かされるこの頃だ」とのこと。「かつては代表作が無いということにこだわった時期があったが、今は、生きている限りたえず進化しているのだから、人生最後の作品が代表作になると思っている。だから、限界を考えていないし年齢も意識してない」と語られた。

作品の核となるメッセージ

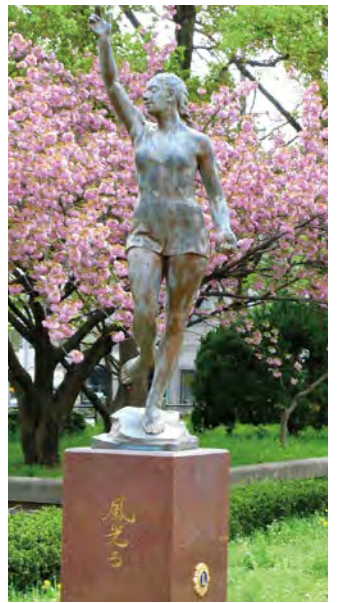
山本さんのこれまでの創作活動の軌跡を著した作品集を通して、作品作りの核心に迫りたいと思う。作品集は



ギャラリーのように並ぶ小作品

6Contents<生命 自然との対話 人々との対話 心の旅 祈り 人格を刻む>で構成されている。作品集より抜粋してみた。

『生命あるものは必ず滅びる。生きものは土から生まれ、また土に還る。生まれ出ずる時、未来の可能性を持った生命はまぶしいほど美しい。〈生命の巡り〉への執着を彫刻で表現してみたい』『いつの頃からか気が付いたら石ころと遊んでいた。木と遊んでいた。



「風光る」名古屋市市政資料館前

土の香りの中にいた。風のささやきや心地よい自然の眩きに耳を傾けていた。いつも自分は自然の一部であり自然の中で生かされていることを感じていた』『彫刻でなければ出来ないことがある。それは自分にしかできない〈美しさの表現〉である』『彫刻が好きである。見ることも作ることも好きである』『自然が持つ力を借りて思いの丈を発信したい』『アトリエの中で作りだされた〈かたち〉が、一人歩きを始める。(中略)春夏秋冬、置かれた場所と自然との対話を続ける。作家の手の届かない自然との対話である』と記されている。また、各Contentsにはより詳しい制作意図も書かれており、作品の内面に深く魅了される。

筆者は素人ながら、山本作品は格調高く、重厚なブロンズの色合い、シンプルなフォルムでありながら動きや空気感があることに好感を持っている。

年間に1作品又はそれ以上の数の作品が全国各地に設置され、今までに制作した作品総数は数えられないほどという。山本さんの60年を超える創作活動を通じ、あらためて凄い偉業であると感じる。まずは名古屋市内に設置されている作品と出会いたいと思う筆者だった。

名古屋市内の作品

＜生命＞「深緑」：名古屋城正門前、「煌き」：名古屋工業大学2号館玄関、「明日への絆」：栗田商会名古屋本店、「生生流転」（第60回日本芸術院賞）：愛知県がんセンター中央病院ホール、「いのちの環」：名古屋市立西部医療センター前

＜自然との対話＞「蒼天」：志段味スポーツランド体育館玄関、「風薫」「風光る」：名古屋市市政資料館前庭、「森からの声」（内閣総理大臣賞）：東桜会館ロビー、「忘れ潮」：サンパーク高岳駅前玄関ロビー

＜人々との対話＞「美しき日々」：サンパーク本陣、「その日」：アスティオス港楽、「共生」：名古屋三越栄店東玄関、「翔き」：名古屋市営地下鉄池下駅入口、「希望」「出逢い」：名古屋駅前地下街ユニモール、「街角」：名古屋広小路ビルディング ストリートギャラリー、「よろこびの朝」：水野本社前 星が丘自動車学校、「伸展の時」：水野クリニック玄関、「今日」：愛知県図書館、「いい日」（日展会員賞）：サンパーク新道、「宙へ」：コムシス名古屋ビル前、「装い」「いのちの環」：京楽産業本社玄関、「若草の季」：名古屋市北区役所玄関

＜心の旅＞「心の旅-アンコール-」：名古屋広小路ビルディング ストリートギャラリー、「スーベニール ヴェネツィア」と「スーベニール クスコ」：サンパークガーデンア神宮東公園、「心の旅-エーゲの海-」：京楽産業本社玄関、「心の旅-新たなる道-」：名古屋市信用保証協会玄関、「心の旅-明日香へ-」：ダイコク電機



「共生」名古屋三越栄店東玄関



「希望」名古屋駅前地下街ユニモール

その他の主な作品

「生命の賛歌」：藤田保健衛生大学フジタホール（豊明市）、「祈り」（第60回白昼展会員記念賞）：藤田保健衛生大学病院医療スタッフ館ホール（豊明市）、「祈りの飛翔」（平和記念像）：一色平和公園（西尾市）、「絆」：吉良ワイ



「森からの声」名古屋市東桜会館ロビー



「深緑」名古屋城正門前

キキビーチ（西尾市）、「大地」：西尾市寺津中学校校庭、「大空へ 立志」：西尾市立一色中学校校庭（西尾市）、「風韻」「舞」「明日へ」：一色学びの館 西尾市立図書館（西尾市）、「いのち巡る」：西尾市役所玄関ホール（西尾市）、「躍進する市民像」：西尾駅前広場（西尾市）、「若い息吹と夢あふれる未来の像」：一色海浜公園広場（西尾市）、「すばらしき日々」：碧南市役所（碧南市）、「栄光へ」：安城総合運動公園（安城市）、「共生-未来へ-」：中部大学2号館（春日井市）、「心の旅-祈りの道-」：中部大学現代教育学部70号館（春日井市）、「豊かなる大地」「手筒花火」：豊川彫刻の道ふれあいプロムナード（豊川市）、「若き志」：豊川市消防署本部前（豊川市）、「憧れ」（西望賞）：稲沢CATV社ビル玄関ホール（稲沢市）、「祈り」：稲沢市民病院ロビー（稲沢市）、「躍動」：城山公園スカイワードあさひ前（尾張旭市）、「第53代横綱 琴桜傑将」：打吹公園広場（鳥取倉吉市）、「生きがい」（日展特選）：芦屋市民会館大ホール前（兵庫県芦屋市）、「大愛」：赤坂パークビル前庭（東京都港区）、「心の旅-新たなる道-」：式年遷宮記念伊勢神宮美術館（三重県伊勢市）、「旅立ちの勢至丸さま」：知恩院和順会館（京都府京都市）、「法然上人尊像」：浄土宗総本山知恩院（京都府京都市）ほか。

※参考資料「山本眞輔の世界 彫刻作品集」

古川美術館財団設立30周年記念展
「山本眞輔 彫刻60年の軌跡」

会期：平成29年5月27日（土）～7月23日（日）
休館日：月曜日
開館時間：10:00～17:00（入館は16:30まで）
主催：公益財団法人古川知足会

ピックアップ

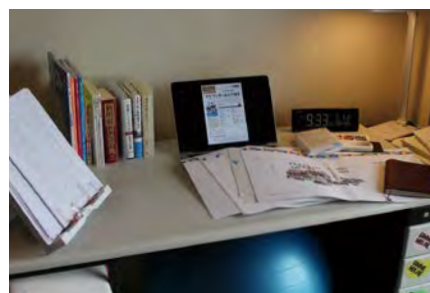
名古屋桜山に生まれた、ひとり出版社「桜山社」

出版業界が最高の売上を上げたのは1996年で2兆6千万円を超えていました。1996年といえば、『脳内革命』『超勉強法』『ソフィーの世界』などが話題になった年です。それから20年、出版業界の売上は下がり続け、2013年からは2兆円を割り込んでいます。これまで多くの人が本と向き合ってきた時間が、ネット検索やSNSでの情報交換に費やされるようになりました。そんな状況ではありますが、ここ10年、小さな出版社が全国各地に立ちあがっています。「『小さな声』を拾いたい」「子どもを育てながら働きたい」「心地よさをかたちにして伝えたい」など、動機は十人十色。刊行物にも写真集あり、絵本あり、復刊ありとさまざまです。

2015年9月には、名古屋にもひとり出版社が誕生しました。桜山の実家の自室が事務所なので「桜山社（さくらやましゃ）」。始めたのは江草三四朗さん。江草さんは2006年と2008年に、自身の営業経験をまとめたビジネス書を出版しています。著者であった人が出版社を立ち上げるという少し珍しいケースです。江草さんが書いた本は、かなりたくさん印刷されましたが読者の手に届いた数は少なく、悲しい思いをしたと言います。なぜこのようなことが起きるのでしょうか。

書店の店頭にある本は、ほとんどが委託品で「取次」という問屋を通して、売上規模にあわせて送られてきます。そして、一定期間店頭において売れなければ返品することができます。出版社側から考えると、新しい本を作って取次に納品すれば、そこで仮の売上が立ちます。この売上数字が必要で、出版社は新しい本をできるだけ大きな部数で、たくさんつくることになります。しかし、読者の手にわたらなかつた本はいずれ返品されてきます。返品は当然マイナス売上です。実際に、江草さんが2冊目の本を出した出版社は2009年に倒産したと言います。

桜山社の本は委託品ではありません。書店からの注文によって出荷する「注文出荷制」をとっています。ほかの小さな出版社も、多くが注文出荷制や書店との直接取引で本を流通させています。江草さんは、その本を必要としてくれる人に、一冊一冊地道ではあるけれども、確実に届け始めていることが実感できて、それがやりがいに繋がってい



桜山社の事務所は実家の自分の部屋

ると言っています。必要としてくれる人に必要な本を届けるのは出版の原点。もともと本は人によって必要性も好みも違います。

大量生産して大量消費できるものではないのです。小さな声を拾って、ていねいに本をつくって、必要としてくれる人に届けるのは、小さな出版社の大きな使命。本の世界が読者にあわせて多様化すれば、書店から離れてしまった本好きも戻ってくるにちがひありません。

桜山社はこれまでに2冊のエッセーを出しています。江草さんが学生時代にアルバイトをしていたときから原稿をお願いしていた小堀勝啓さんの『幸せを声にのせて』。高校時代の恩師の弟さんである吉村功さんの『アナウンサーは足で喋る』。「人」がすべてと言い切る桜山社の本だけあって、どちらも人物の魅力があふれています。秋には3冊目を刊行予定。(Y)

参考文献：『ひとり出版社、という働きかた』
西山雅子編 河出書房新社刊



5月に出した
『アナウンサーは足で喋る』
(吉村功 著)



初めて出した
『幸せを声にのせて』
(小堀勝啓 著)

いとしの サブカル

プロレスは文化なのです

今池プロレス代表・今池西南商店街振興会副理事長

マグナム ^{いまいけ} 今池

昭和35年創業やしとり屋「きも善」2代目大将、今池商店街連合会のバックアップによるローカルインディプロレス団体「今池プロレス」を立ち上げ街とプロレスの発展のために闘うオヤジ。今池プロレス絶対王者。

今では見る機会が少なくなったプロレス。

しかし、今こそ必要なのが「プロレスごっこ」。

かつての子どもたちは旅先の宿に敷き詰められた布団の上で、プールで、体育館でみつけたマットの上でプロレスごっこをしたものでした。

名目上は「決して真似をしないでください」。

でも、プロレスごっこしなきゃダメなんです。プロレスには反則をした場合、レフリーの5カウント以内にやめなければいけないというルールがあります。そんな競技、他にありませんか？ 普通は反則をすればその時点でペナルティが課せられます。でも、プロレスは大丈夫なんです。強面レスラーもレフリーのカウントが「4」でさっと攻撃の手を止めます。レフリーに「参った」とアピールすれば終わります。プロレスごっこをする子供たちは、ちゃんとルールをわかっています。

ギブアップすればすぐに手を緩め、それ以上は攻撃しない。親子だったり、友だちだったり、兄弟だったり。非力なものは相手の強さを思い知らされ、また優しさも知る、究極のボディランゲージ、プロレスごっこ。

自然と覚えたルール、必殺技。現在の格闘技番組の多くは相手を潰すまで攻める、それを子どもたちが真似をする。

最近、青少年による暴力沙汰がニュースになります。

「死ぬとは思わなかった」

リアルに骨を折ったり、殴り合ったりする格闘技番組を普段から見ている影響も少なからずあるのではと思います。

プロレス界もインディー団体（インディペンデント団体）が増え、愛知県だけでも10近くあると思われます。最近ではメジャー、インディーともう一つローカルインディーと呼ばれるカテゴリも増え、プロレスを通じ地域と連携し、お互いを盛り上げるといったような活動も盛んになってきています。

ジャンルも格闘技色のストロングスタイル、飛んだり跳ねたりのルチャスタイル、エンターテインメント性を強く出したアメリカンスタイル、流血のデスマッチなど。ファンも多様化し、プロレス女子などという言葉も生まれました。応援するレスラーがやられまくる、最後はピンチから逆転し、得意

技で相手を倒す。そんな茶番劇が大好きなんです。

プロレスと聞くと「あれは台本があるんだろ」などと言われます。しかし、考えてみてください。闘いの台本を書く、そんな事ができると思いますか？ 時代劇の殺陣でもあるまいし、何十分も闘う試合に台本なんてムリです。対戦相手とは当日初顔合わせなんてのも珍しくありません。人気選手ともなると毎日のように試合があります。内容を使い回して違う会場でやる、それをプロレスでできると思いますか？ 「上から飛んでくるのがわかってるんだから避けたい」「あんなのワザとやられてる」というのもよく聞かれます。そうなんです、わかってるんです。しかしレスラーは避けません。避けたら相手選手は真逆さまに地面やマットに叩きつけられ怪我をし、試合続行は不可能になります。この選手は俺の事を受け止めてくれる。そう信じているから飛んで行けるのです。自分が怪我をしない、相手も怪我をさせない。相手はこの技は絶対に受けられないと思ったらその時点で技は掛けません。それがお互いの信用という暗黙のルールなんです。それを否定的に観てはつまらなくなります。茶番で良いじゃないですか。プロレスを楽しんじゃってください。きっと世界が広がります。

今池プロレスのコンセプトは「プロレスで商店街を、商店街でプロレスを盛り上げよう」。野球やサッカーを応援するのと同じようにプロレスを応援する商店街があっても良いじゃないか！ なのです。



今池プロレス

うないぐみコンサート 初秋の唄会



古謝美佐子をはじめとする初代ネーネーズのメンバーを中心に結成された「うないぐみ」。沖縄民謡に精通した実力派4人組が名古屋にやってきます!

伝統的な沖縄民謡からオリジナル曲、カバー曲まで多種多彩なレパートリーをお楽しみください。

曲目

童神、島ぬ言ぬ葉、うない島、ナークニー
〜かいされ、ネーネーズメドレー 他

※曲目は変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。



比屋根幸乃、島袋恵美子、古謝美佐子、宮里奈美子



日時

2017年9月8日(金) 18:30開演



会場

名古屋市芸術創造センター

料金
[全指定席]

一般
3,800円

友の会
2,800円

新規入会キャンペーン<友の会会員権付>

3,500円

通常:年会費3,000円+会員価格2,800円
今回:年会費0円+新規価格3,500円

※キャンペーン特典として1年分の友の会会員権をプレゼント♪この機会にご入会いただくと2,300円もお得です!

チケット
取扱い

- 名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL:052-249-9387(平日9:00~17:00/郵送可)
そのほか事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。
- チケットぴあ Pコード:328-957 TEL:0570-02-9999 ※サークルK・サンクス、セブンイレブン、中日新聞販売店でも直接お求めいただけます。
※一般のみの取り扱いです。

頼もしい味方をお探しですか?



集客・販促プランナー



アートディレクター



印刷コンサルタント



駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881

〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <http://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

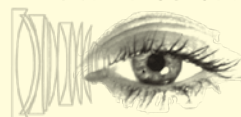


舞台音響・映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営